

予報本文

イネ

1 穂いもち

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、葉いもちの発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく（－）、日照時間は平年並または多い（－）と予想されている。
- (3) 普及センター、調査協力員からの報告によると、一部地域で葉いもちの発生が目立つ（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
- (2) 穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- (3) コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに葉いもちが多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- (4) 粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (5) カメムシとの同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に、薬量が不足しないように散布する。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生は認めていない（平年比やや少ない）（－）。
- (2) 7月中旬現在、分けつ数は平年比多い（＋）（農林センター調べ）。
- (3) 向こう1か月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (2) 例年発生の多いほ場や分けつの多いほ場では発生が多くなるので十分注意する。
- (3) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (4) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。

3 セジロウシ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
- (2) 成幼虫とも吸汁加害するので、株当たり10匹以上の発生を認めた場合は防

除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１） 7月第3半旬現在、予察灯への誘殺を認めていない。
- （２） 7月中旬の巡回調査で、発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 海外からの飛来害虫である。
- （２） 株当たり5匹以上もしくは短翅虫を10株当たり2匹以上認めた場合は、直ちに防除する。この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。

5 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、すす病が発生する。

6 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、本田での発生量は平年並。
- （２） 7月中旬現在、畦畔での発生量は平年比やや多い（＋）。
- （３） 向こう1か月の気温は平年並または高いと予想されている。

*** 詳細 平成24年7月25日付の防除所ニュース第3号を参照**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメ類による被害が増加している。
- （２） 水田周辺のイネ科雑草の穂餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- （３） 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- （４） 近年多発し問題となっている地帯では穂揃期と傾穂期の防除（共同、一斉）が有効である。
- （５） 平成24年7月上旬に、京田辺市の予察灯でミナミアオカメムシの誘殺を確認した。本種は他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

7 コブノメイガ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 海外からの飛来害虫である。

(2) 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネに集中飛来するので注意する。

※今後注意すべきその他の病虫害等は p 1 2 を参照

黒大豆

1 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

(1) 7月第3半旬現在、予察灯への誘殺を認めていない(平年並)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 開花期直前から若莢着生期に飛来し始める。

(2) ほ場周辺に雑草地などカメムシ類の発生しやすい場所があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

(3) 薬剤散布は若莢期から10日間隔で2～3回実施する。

2 サヤムシガ類

予報内容 発生量：平年比多い(前年比多い)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は平年比多い(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 年3～4回発生する。

(2) カメムシ類との同時防除を考慮する。

3 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比少ない)

予報の根拠

(1) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期(1～2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く見えることから白変葉と呼ばれる。

(2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、発生初期の防除に留意する。

(3) ほ場を見回り早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除く。

4 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年並)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)

- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ない(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖が早く、高密度になってからでは防除効果が劣る。
 (2) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。

アズキ

1 ハスモンヨトウ

黒大豆の項参照。なお、ダイズに比べ白変葉が見つけにくいので注意する。

2 ハダニ類

黒大豆の項参照。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 12 を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。
 (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 例年8月下旬から9月にかけて発生が増加するので、8月中下旬までに防除する。

2 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年並。
 (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
 (2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
 (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ないと

予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多い。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年並。
(2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が低くて涼しい夏には発病が進展する。

5 カメモシ類（果樹全般）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月第3半旬現在、予察灯への誘殺数は京田辺で平年比多く（+）、京丹後で平年並。
(2) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや多い（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。
(2) 収穫が近いものも多いため、農薬の使用にあたっては使用基準を厳守する。
(3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用するとカイガラムシ類やハダニ類の発生が増えることがある。

*** 詳細 平成24年7月13日付の発生予察注意報第1号を参照**

6 ハダニ類（ナシ、カンキツ、ブドウ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はナシ、カンキツで平年並、ブドウで発生を認めていない（平年並）。
(2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ない（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。
(2) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（山城 前年比やや多い）

(丹波 前年比やや少ない)

防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、山城で平年比や多く(+)、丹波で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく(－)、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽伸育期に降雨が続くと発生が多くなる。

2 もち病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく(－)、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。
- (2) 山間地で発生が多い。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年比多い(前年比多い)

発生時期：第3世代幼虫ふ化期

山城 8月第5～6半旬(平年比遅い)

丹波 8月第3～4半旬(平年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代幼虫の発生量は平年比多い(+)
- (2) 第1世代成虫の発生時期は宇治で平年比遅く、綾部で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比多い(前年比多い)

丹波 平年並(前年比多い)

発生時期：第4世代幼虫ふ化期

山城 8月第6半旬～9月第1半旬(平年比遅い)

丹波 8月第3～4半旬(平年比やや早い)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第3世代幼虫の発生量は山城で平年比多く(+)、丹波で平年並。
- (2) 第2世代成虫の発生時期は、宇治で平年比遅く、綾部で平年比やや早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返し、第3世代成虫が8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 弧状仕立て園の防除適期は、三番茶芽の第2葉開葉期である。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く（＋）、降水量は平年並または少ない（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや少ない）
丹波 平年比やや少ない（前年比少ない）
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（＋）、丹波で平年比やや少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等である。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：平年並（山城 前年比やや少ない）
（丹波 前年並）
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城、丹波とも平年比やや少ない（－）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ない（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高い場合は注意する。
- (3) 発生の多い園では、三番茶芽の萌芽期と第1葉開葉期に2回防除を行うと効果が高い。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp12を参照

野菜

1 うどんこ病（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生量はキュウリで平年並、ナスで平年比やや少ない（－）。
- （２） 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- （２） トウガラシ類では、ハダニ類の被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。

2 ペと病（キュウリ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生量は平年並。
- （２） 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 病原菌は、多湿条件で侵入、まん延しやすい。
- （２） 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

3 褐斑病（キュウリ）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （２） 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 病原菌の発病適温は25～30℃である。
- （２） 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。

4 炭そ病（キュウリ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生量は平年比多い（＋）。
- （２） 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 夏秋作に発生しやすいので注意する。
- （２） 窒素肥料の過用を避ける。

5 斑点細菌病（トウガラシ、キュウリ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

(2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、果実及び葉の気孔等から入って発病する
場合が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

6 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリ、ナスで平年比多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ない
（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (3) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

7 ハモグリバエ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリで平年比やや少なく（-）、ナスで平年
比少ない（-）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く（+）、降水量は平年並または少
ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマトハモグリバエは、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 定植時には、葉等に寄生していないことを確認する。
- (3) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。

8 アザミウマ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリで平年比やや多く（+）、ナスで平年比
多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ない
（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するものも
いる。
- (2) 雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。

9 ネギアザミウマ（ネギ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ない(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

10 ネギハモグリバエ(ネギ)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並または高く(+)、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

11 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

- (1) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期(1~2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、発生初期の防除に留意する。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp12を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、露や濡れ葉状態の時にはほ場に入らないなど注意する。

2 フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 近年、発生が増加傾向にある。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

3 ニカメイガ（ニカメイチュウ）

- (1) 発蛾最盛期は通常、8月第4半旬である。
- (2) 第1世代幼虫による被害が目立ったほ場、茎の太い品種やモチの作付田では発生しやすい。
- (3) 平坦部の野菜・チャ・イチジク等栽培地域の常発地では注意する。

アズキ

1 アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類、オオタバコガ

- 発生すると被害が大きく、莢に食入すると防除が難しいので、開花始めから7～10日間隔で少なくとも2回は防除を行う。

チャ

1 チャトゲコナジラミ

- 平成24年7月中旬の巡回調査で、府内全域で発生を確認した。本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ち着いた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 オオタバコガ、タバコガ、シロイチモジヨトウ

- 発生すると大きな被害になるので注意する。
- オオタバコガ及びタバコガは果実に食入すると、またシロイチモジヨトウは齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

2 カメムシ類（トマト、ナス、トウガラシ、インゲン等）

- 周囲に雑草地やダイズなどカメムシ類の発生しやすいほ場があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報（7 月 21 日から 8 月 20 日までの天候見通し）

平成 24 年 7 月 20 日
大阪管区気象台発表

＜予想される向こう 1 か月の天候＞

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう 1 か月の平均気温は平年並または高い確率ともに 40% です。

週別の気温は、1 週目が平年並の確率 50%、2 週目が平年並または高い確率ともに 40% です。

＜向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	20	40	40
降 水 量	40	40	20
日 照 時 間	20	40	40

病虫害防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「向こう 1 か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少なく、日照時間は平年並または多いと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第 1 半 旬	第 2 半 旬	第 3 半 旬	第 4 半 旬	第 5 半 旬	第 6 半 旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去 10 か年の平均とする。

データが 10 年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後 2 日以内
やや早い	平年値より 3～5 日早い
やや遅い	平年値より 3～5 日遅い
早い	平年値より 6 日以上早い
遅い	平年値より 6 日以上遅い

2) 量（発生量、発生面積等）

平年並	平年値並の発生で 10 年間に 4 回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10 年間に 2 回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10 年間に 2 回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10 年間に 1 回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10 年間に 1 回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」には発生量等を予想している病害虫を、「今後注意すべきその他の病害虫等」には発生量等の予想はしていませんが、注意すべき病害虫について記載しています。

(見方の例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「Ⅱ 用語の定義」の「4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく（-）、丹波でやや多い（+）。
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の（-）、（+）は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合は発生量が少なくなる要因、（+）は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コーナー」の「農業情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター		電話番号一覧
・ 京都乙訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山城北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山城南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中丹東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中丹西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

農作物病虫害情報サービス

・ ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－ 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること －